河内長野市文化財調査報告書第44輯
河内長野市埋蔵文化財調査報告書XXIV

滝　尻　遺　跡

２００６年３月

河内長野市教育委員会

河内長野市文化財調査報告書第44輯

河内長野埋蔵文化財調査報告書ＸＸⅣ

滝尻遺跡

正 誤 表

頁	行など	誤	正
挿図目次	第9図	SD1遺構実測図(80／1)	SD1出土遺物実測図
挿図目次	第10図	SD1出土遺物実測図	SD1遺構実測図(80／1)
図版目次	図版4	SX1(東から)、SX1内焼土検出状況(北から)	第1調査区　SX1(東から)、SX1内焼土検出状況(北から)
図版目次	図版5	SX2全景(南から)、SX2(東から)	第1調査区　SX2全景(南から)、SX2(東から)
図版目次	図版6	SX1内SX4(東から)、SX1内SX5(西から)	第1調査区　SX内SX4(東から)、SX内SX5(西から)
図版目次	図版7	SX1内SX6(南から)、SX2遺物出土状況(北から)	第1調査区　SX1内SX6(南から)、SX2遺物出土状況(北から)
16	第9図	SD1出土遺物実測図(80／1)	SD1出土遺物実測図
21	22	(第6･12･16図、	(第12･16図、

河内長野市文化財調査報告書第44輯
河内長野市埋蔵文化財調査報告書XXIV

滝尻遺跡

２００６年３月

河内長野市教育委員会

序　　文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、豊かな自然に恵まれ、高野街道に代表される、和歌山や奈良へ向かう街道の要衝として発展してきた街です。このため、市内には数多くの文化財が残されています。

この様な河内長野市も大阪市内への通勤圏に位置しているため、住宅都市として発達してきました。この住宅開発がもたらした自然や文化財に対する影響も大きなものがあります。特に、地下に眠る埋蔵文化財は、開発と直接的に結び付く大きな問題です。

遺跡に託されている河内長野の先人達のメッセージである文化遺産を保護・保存し、現在の、更には未来の市民へと伝えていくことは、現代に生きる私達の責務であります。河内長野市においては重要な課題である開発と文化財保護との調和のため、開発に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その把握に努めています。

本書は発掘調査の成果を収録しています。皆様が先人達の残したメッセージの一部でもある文化財に対するご理解を深めて頂くと共に、文化財の保護・保存・研究するための資料として活用して頂ければ幸いです。

これらの発掘調査に協力して頂きました施主の方々の埋蔵文化財への深いご理解に末尾ながら謝意を表すものです。

平成18年3月

河内長野市教育委員会
教育長　福　田　弘　行

例　　言

1．本報告書は、平成15年度に行われた滝畑ふるさと施設整備事業に伴う滝尻遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、河内長野市の委託を受けて河内長野市教育委員会の指導のもと河内長野市遺跡調査会が行った。平成17年度の遺物整理については、河内長野市遺跡調査会の解散によって、河内長野市教育委員会が行った。
3．調査にかかる費用は全額、河内長野市が負担した。
4．発掘調査は、河内長野市教育委員会社会教育課文化財保護係鳥羽正剛（現高野町教育委員会）・福田和浩（現河内長野市立郷土資料館）を担当者として実施した。
5．本書の執筆・編集作業は、酒井祐介が行い、湯浅敬子がこれを補佐した。
6．遺物整理業務及び本書の編集業務の一部は㈱総合文化企画に委託して行った。
7．測量作業は写測エンジニアリング株式会社に委託して行った。
8．発掘調査及び内業整理については下記の方々の参加・指導・協力を得た。記して感謝する。（敬称略）
庵ノ前智博、大塚和矢、大塚美幸、大西京子、喜多順子、小浜加奈子、斎田菜穂子、末永剛、谷岡能史、中西和子、中村浩（大谷女子大学教授）、藤田徹也（現富田林市教育委員会）、桝本裕子、松尾和代、牟田口京子、撫養健至、矢倉嘉人、安間克己、田中清美（財団法人大阪市文化財協会）、喜多貞裕、湯浅敬子、大西健吾、大谷女子大学
9．本調査の記録はスライドフィルム等でも保管しており、広く一般の方々に活用されることを望むものである。

凡　　例

1．本報告書に記載されている標高はＴＰを基準としている。
2．土色は『新版標準土色帖』による。
3．平面測量は国土座標第Ⅵ系による５ｍメッシュを基準に実施した。
4．図中の北は座標北である。
5．本書の遺構名は下記の略記号を用いた。
ＳＫ…土坑　ＳＤ…溝　ＳＰ…遺物出土ピット　ＳＷ…石垣　ＳＸ…落ち込み・不明
6．遺構実測図の縮尺は1/40・1/80とした。
7．遺物実測図の縮尺は、土器1/4、石器1/2とした。
8．遺物名は、土師質土器を土師質と略称し、器種名を付した。器種名については、河内長野市教育委員会の表記によるものとする。
9．遺物の断面は、土師器・土師質土器・石器は白抜き、須恵器・瓦器・陶磁器は黒塗りである。
10．本文中の形式分類、編年は、須恵器については田辺昭三氏の陶邑古窯址群編年、瓦器塊については尾上実氏の和泉型瓦器塊の編年を用いた。
11．遺物番号と写真図版の番号は一致する。
12．細片のため図化できなかった遺物は遺物番号を省略して記していない。

目　　次

序文
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
図版目次
第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査に至る経過…… 1
　第２節　位置と環境…… 4
第２章　調査の結果…… 5
　第１節　概要…… 5
　第２節　基本層序…… 5
　第３節　遺構と遺物…… 13
第３章　まとめ…… 31

挿　図　目　次

第１図　河内長野市遺跡分布図(1/40000) …… 2
第２図　遺跡・調査区位置図(1/5000)…… 4
第３図　調査区土層断面実測図(1/60)…… 7～8
第４図　調査区土層断面実測図(1/60)…… 9～10
第５図　調査区遺構配置図(1/300) …… 11～12
第６図　ＳＫ１遺構実測図(1/40)…… 13
第７図　ＳＫ１・２遺物実測図…… 14
第８図　ＳＫ３遺構実測図(1/40)…… 14
第９図　ＳＤ１遺構実測図(1/80)…… 16
第10図　ＳＤ１出土遺物実測図…… 15
第11図　ＳＸ１出土遺物実測図…… 20
第12図　ＳＸ２出土遺物実測図…… 22
第13図　ＳＸ３出土遺物実測図…… 23
第14図　包含層出土遺物実測図…… 25
第15図　ＳＫ１遺構実測図(1/40)…… 26

第16図　ＳＸ１・ＳＸ２遺構配置模式図…… 28
第17図　滝尻遺跡出土須恵器と陶邑・東山窯出土須恵器…… 29

表　目　次

第１表　河内長野市遺跡地名表…… 3

図　版　目　次

図版１　第１調査区全景
図版２　第１調査区遠景（北から）、第１調査区１-１区全景（北から）
図版３　第１調査区１-２区全景（東から）、ＳＸ１全景（南から）
図版４　ＳＸ１（東から）、ＳＸ１内焼土検出状況（北から）
図版５　ＳＸ２全景（南から）、ＳＸ２（東から）
図版６　ＳＸ１内ＳＸ４（東から）、ＳＸ１内ＳＸ５（西から）
図版７　ＳＸ１内ＳＸ６（南から）、ＳＸ２遺物出土状況（北から）
図版８　第２調査区全景
図版９　第２調査区全景（東から）、第２調査区（南から）
図版10　遺物　ＳＸ１（６～12）
図版11　遺物　ＳＸ１（22・23）、ＳＸ２（24・34）、ＳＤ１（４・５）、包含層（35・36）
図版12　遺物　ＳＸ１（13～21）、ＳＸ２（25～33）
図版13　遺物　ＳＫ１（１）、ＳＫ２（２）、ＳＤ１（３）、ＳＸ３（50）、包含層（37～49）

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

当該発掘調査は、河内長野市（担当、環境経済部クリーンセンター環境事業推進室・以下「市」という）を事業主体とする滝畑ふるさと施設整備事業（以下「事業」という）に伴う事前調査である。

平成13年度に、市より、河内長野市教育委員会（以下「市教委」という）へ事業予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて照会があった。事業地が滝尻遺跡に近接することと、開発面積が500㎡をこえるため、河内長野市開発事業指導要綱に基づいて、試掘調査の必要があることを伝えた。また、試掘調査依頼書を提出することを求めた。

平成13年４月４日には、市から市教委へ試掘調査のための依頼書の提出があった。市教委は河内長野市遺跡調査会（以下「調査会」という）へ試掘調査を依頼するようにと回答した。その後、市は、市教委の指導のもと、調査会へ試掘調査を依頼した。

試掘調査は平成13年６月18日から平成13年10月31日にかけて行われた。試掘調査の結果、古墳時代・中世の遺物が出土し、その遺物の分布が、近接する滝尻遺跡まで広がることが確認された。市教委はこの結果を受けて、工事施工前に全面調査の必要があると判断し、河内長野市に伝えた。

その後、市教委では試掘調査の結果を受けて、河内長野市に対して、文化財保護法57条の６に基づく遺跡発見の通知（滝尻遺跡の範囲拡大）の提出を求めた。平成13年10月25日付けで、通知の提出があり、市教委では、平成13年11月22日付けで、大阪府教育委員会へ進達を行った。

その後、市は河内長野市遺跡調査会へ発掘調査の依頼を行い、平成16年１月20日には契約書の締結を行った。発掘調査は平成16年１月21日から平成16年３月19日にかけて行われ、内業整理については、河内長野市遺跡調査会の解散にともなって市教委の直営事業として行い、作業の一部を外部委託して実施した。結果、平成18年３月20日に、埋蔵文化財記録保存にかかわるすべての調査を完了した。

第１図　河内長野市遺跡分布図（1/40000）

番号	文化財名称	種類	時代
1	長野神社遺跡	社寺	室町以降
2	河合寺遺跡	社寺	平安以降
3	観心寺遺跡	社寺	平安以降
4	大師山古墳	古墳	古墳（前期）
5	大師山南古墳	古墳？	古墳（後期）
6	大師山遺跡	集落・生産	弥生（後期）・平安
7	興禅寺遺跡	社寺	中世以降
8	烏帽子形八幡神社遺跡	社寺	室町以降
9	塚穴古墳	古墳・墳墓	古墳（後期）・近世
10	長池窯跡群	生産	平安～近世
11	小山田1号古墓	墳墓	奈良
12	小山田2号古墓	墳墓	奈良
13	延命寺遺跡	社寺	平安以降
14	天野山金剛寺遺跡	社寺・墳墓	平安以降
15	日野観音寺遺跡	社寺・生産	縄文・平安～近世
16	地蔵寺遺跡	社寺	中世以降
(17)	岩湧寺遺跡	社寺	平安以降
18	五ノ木古墳	古墳	古墳（後期）
19	高向遺跡	集落	旧石器～中世
20	烏帽子形城跡	城館・生産	中世～近世
21	喜多町遺跡	集落	縄文・古墳～中世
22	烏帽子形古墳	古墳	古墳（後期）
23	末広窯跡	生産	中世
24	塩谷遺跡	散布地	縄文～近世
25	流谷八幡神社	社寺	平安以降
26	蟹井淵南遺跡	散布地	中世
27	蟹井淵北遺跡	散布地	中世
28	天見駅北方遺跡	散布地	中世
29	千早口駅南遺跡	社寺	中世
30	岩瀬薬師寺遺跡	社寺	中世以降
31	清水遺跡	散布地	中世
32	伝「仲哀廟」古墳	古墳？	
(33)	堂村地蔵堂跡	社寺	近世
(34)	滝畑埋墓	墳墓	近世
(35)	中村阿弥陀堂跡	社寺	近世
(36)	東の村観音堂跡	社寺	近世
(37)	西の村観音堂跡	社寺	近世
38	清水阿弥陀堂跡	社寺	近世
39	滝尻弥勒堂跡	社寺	近世
(40)	宮の下内墓	墳墓	古墳
41	宮山古墳	古墳	古墳
42	宮山遺跡	集落	縄文・奈良
43	西代藩陣屋跡	散布地・城跡	飛鳥～奈良・江戸
44	上原町墓地	墳墓	近世
45	惣持寺跡	散布地・社寺	縄文・奈良・鎌倉
46	栗山遺跡	祭祀	中世～近世
47	寺ケ池遺跡	散布地	縄文
48	上原遺跡	散布地	旧石器～近世
49	住吉神社遺跡	社寺	近世以降
50	高向神社遺跡	社寺	中世以降
51	青が原神社遺跡	社寺	中世以降
52	膳所藩代官所跡	城館	江戸
53	双子塚古墳跡	古墳	古墳
54	菱子尻遺跡	散布地・社寺	縄文～近世
55	河合寺城跡	城館	中世
56	三日市遺跡	集落・古墳他	旧石器～近世
57	日の谷城跡	城館	中世
58	高木遺跡	散布地	縄文
59	汐の山城跡	城館	中世
60	烽山城跡	城館	中世
61	稲荷山城跡	城館	中世
62	国見城跡	城館	中世
63	旗蔵城跡	城館	中世
64	権現城跡	城館	中世
(65)	天神社遺跡	社寺	中世以降
(66)	葛城第15経塚	経塚	平安以降
67	加賀田神社遺跡	社寺	中世以降
68	庚申堂遺跡	社寺	近世以降
69	石仏城跡	城館	中世
70	佐近城跡	城館	中世
71	旗尾城跡	城館	中世
72	葛城第16経塚	経塚	平安以降
(73)	葛城第18経塚	経塚	平安以降

番号	文化財名称	種類	時代
(74)	葛城第19経塚	経塚	平安以降
(75)	笹尾塞	城館	中世
(76)	大沢塞	城館	中世
(77)	三国山経塚	経塚	平安以降
(78)	光滝寺遺跡	社寺	中世以降
(79)	猿子城跡	城館	中世
80	蟹井淵神社遺跡	社寺	中世以降
(81)	川上神社遺跡	社寺	中世以降
82	千代田神社遺跡	社寺	中世以降
83	向野遺跡	集落・生産	縄文・平安～近世
84	古野町遺跡	散布地	中世
85	上原北遺跡	集落	中世
86	大日寺遺跡	社寺・古墳・墳墓	弥生～近世
87	高向南遺跡	散布地	鎌倉
88	小塩遺跡	集落	縄文～奈良
89	加塩遺跡	集落	古墳（後期）
90	尾崎遺跡	集落	古墳～中世
91	ジョウノマエ遺跡	城館？	中世
92	仁王山城跡	城館	中世
93	タコラ城跡	城館	中世
94	岩立城跡	城館	中世
95	上原近世瓦窯	生産	近世
96	市町東遺跡	散布地	弥生・中世
97	上田町窯跡	生産	近世
98	尾崎北遺跡	集落	古墳～中世
99	西之山町遺跡	散布地	中世
100	野間里遺跡	集落	平安
101	鳴尾遺跡	散布地	中世
102	上田町遺跡	散布地	古墳・中世
103	上原中遺跡	散布地	古墳・中世
104	小野塚遺跡	墳墓	中世
(105)	葛城第17経塚	経塚	平安以降
106	薬師堂跡	社寺	中世以降
107	野作遺跡	生産	中世
108	寺元遺跡	集落・社寺	縄文・奈良・中世
(109)	鳩原遺跡	散布地	中世
110	法師塚古墳跡	古墳	古墳
111	山上講山古墳跡	古墳	古墳
112	西浦遺跡	集落	古墳・中世・近世
113	地福寺跡	社寺	近世
114	宮の下遺跡	集落	平安～中世
115	栄町遺跡	散布地	弥生・古墳・中世
116	錦町遺跡	散布地	中世
(117)	太井遺跡	散布地	縄文・中世
118	錦町北遺跡	集落	弥生・中世・近世
119	市町西遺跡	集落	縄文・中世
120	栄町南遺跡	集落	中世
121	栄町東遺跡	散布地	弥生・中世
122	楠町東遺跡	散布地	弥生
123	汐の宮町南遺跡	散布地	弥生・奈良
124	汐の宮町遺跡	散布地	中世
125	神ガ丘近世墓	墳墓	近世
126	増福寺	社寺	中世以降
127	三昧城遺跡	墳墓・城跡	中世・近世
128	松林寺遺跡	社寺	近世以降
129	昭栄町遺跡	散布地	中世
*130	東高野街道	街道	平安以降
*131	西高野街道	街道	平安以降
*132	高野街道	街道	平安以降
133	上原東遺跡	散布地	弥生・中世・近世
134	地蔵寺東方遺跡	散布地・墳墓	弥生・鎌倉
135	本多町北遺跡	散布地	中世
136	下里町遺跡	散布地	古墳・中世
137	あかしあ台遺跡	散布地	近世
138	岩瀬北遺跡	集落	中世
139	岩瀬近世墓地	墳墓	近世
140	昭栄町東遺跡	散布地・池跡	縄文・中世・近世
141	三日市北遺跡	集落	縄文・弥生～中世
142	三日市宿跡	宿跡に伴う街並	中世～近世
143	上田町宿跡	宿跡に伴う街並	中世～近世
144	滝尻遺跡	散布地	縄文・古代・中世
145	市町北遺跡	散布地	中世

（ ）は地図範囲外　* は街道につき地図上にプロットせず

第１表　河内長野市遺跡地名表

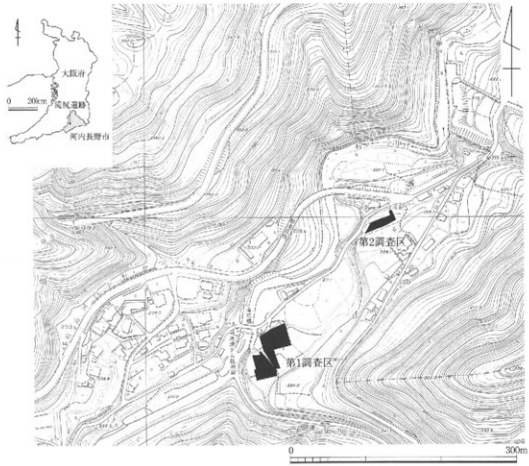
第２節　位置と環境

滝尻遺跡は、河内長野市滝畑に位置する。

地理的環境としては、大阪府と和歌山県の境を東西に走る長さ約50kmの和泉山脈に水源を持つ石川上流部右岸、標高約206mから214mに位置する。遺跡の三方を和泉山脈の山々に囲まれ、石川による狭小な河岸段丘上に営まれている。

歴史的環境としては、北東1.0kmの石川右岸に中世の城館の旗蔵城跡、南西1.2kmの滝畑ダム左岸に近世の寺院跡である清水阿弥陀堂、また北西0.8kmの和泉市との市境には中世の城館である国見城跡が位置している。

平成12年度の当該遺跡調査で[註1]、縄文時代後期から晩期にかけての土器が検出されたことから、石川上流域の縄文時代の遺跡の分布を考える上で貴重な成果が得られた。中世ついては、滝畑村として人々の生活が滝尻においては、すでに14世紀中頃には始まっていたことが考古学的に確認されている。更に本次の調査で古墳時代中期の遺構・遺物も確認された。



第２図　遺跡・調査区位置図（1/5000）

第２章　調査の結果

第１節　概要

本次発掘調査は、滝畑ふるさと施設整備工事に伴い工事敷地内に２箇所の調査区を設定し、実施した。調査区の規模は、工事予定地西側に位置する第１調査区が、一辺約30mの西側部と一辺36mの東側部に分けられる。また予定地東側に位置する第２調査区が、東西約40m×南北約10mを測る。調査面積は、合計で約2500㎡である。

調査は、調査区の設定後、バックホウによる機械掘削を行い、その後作業員による人力で包含層掘削を行った。そして表土及び旧耕土層を除去し、遺構検出を行った結果、第１調査区では古墳時代の落ち込みやピット、中世以降の石垣などを確認することができた。遺物は縄文土器、砂岩製敲石、サヌカイト剥片、古墳時代中期から後期にかけての土師器、須恵器、古代の土師器、中世の土師質土器、瓦器、陶磁器、瓦が出土した。

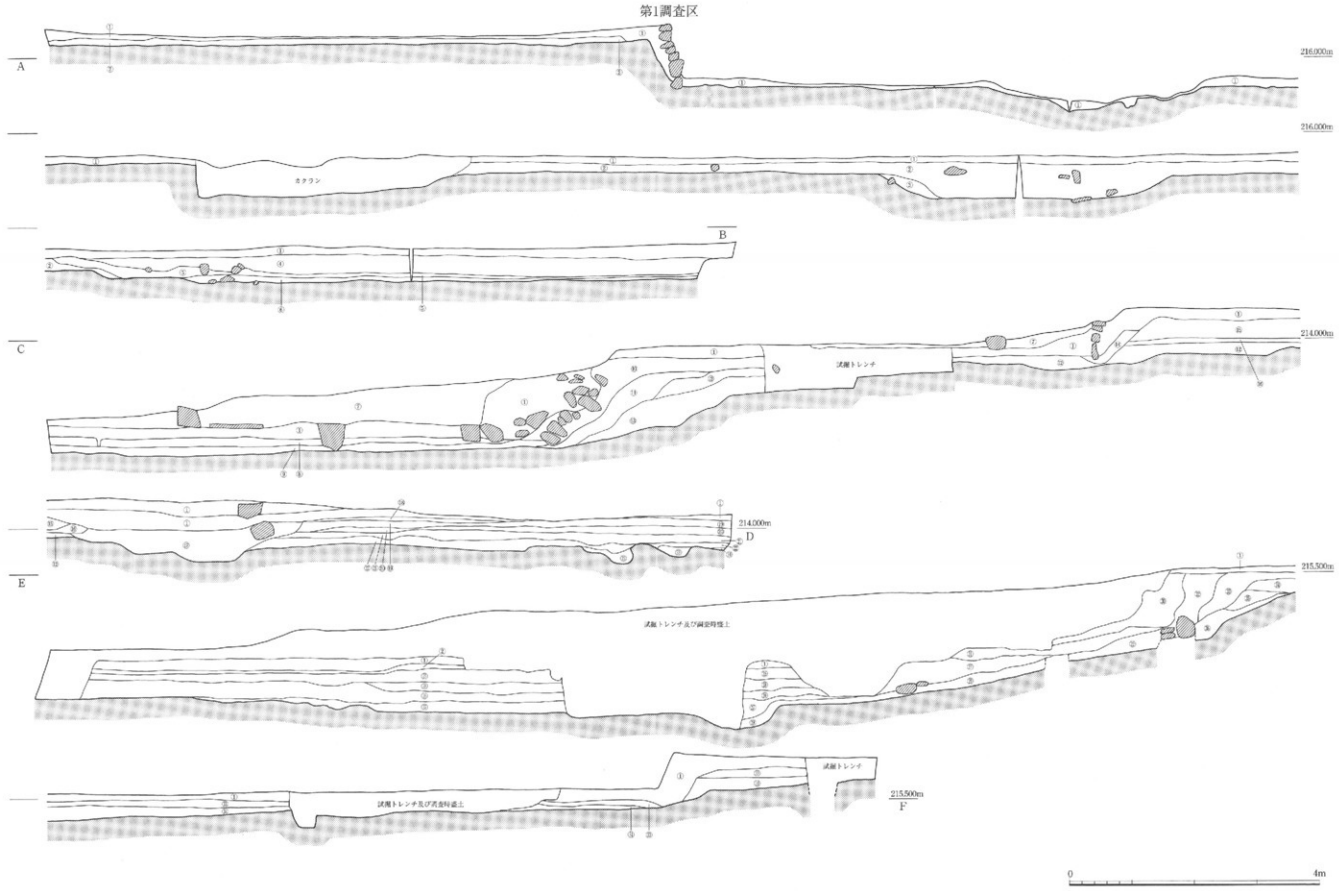
第２調査区では土坑やピットを検出したが、遺物の出土はない。平成12年度の調査区[註１]は第２調査区の北側に近接しており、縄文時代後期から晩期の土器が検出されたことから当該期の遺構の検出が予測されたが、検出した遺構は後世の耕作に伴うものであった。

第２節　基本層序

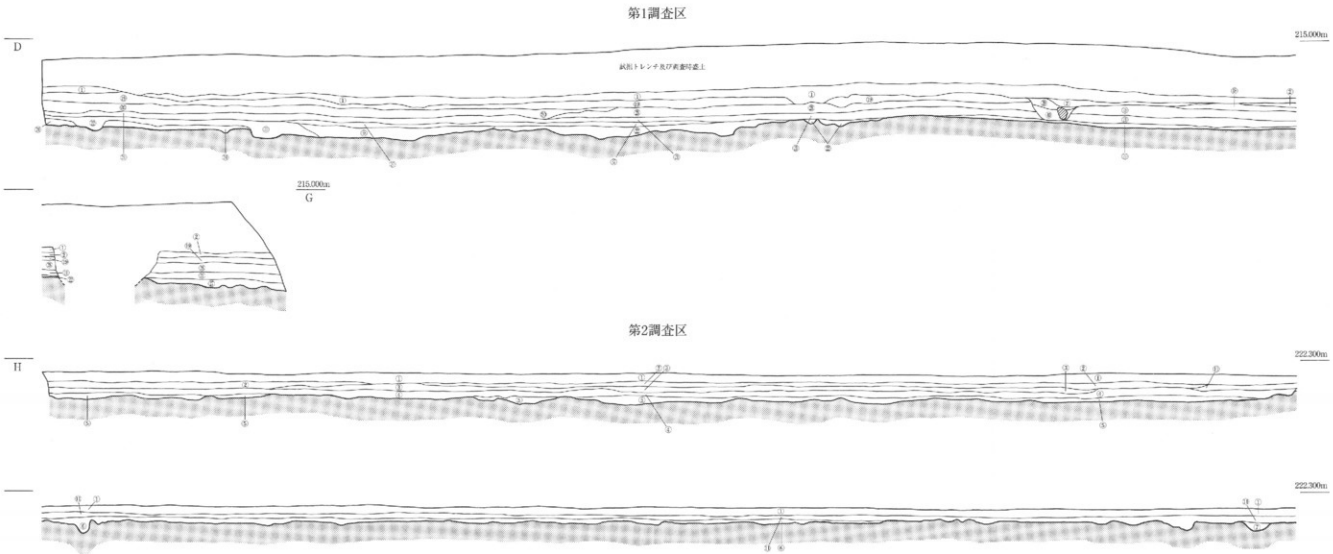
調査区の層序は、調査地点により大きく異なる。それは、現在の耕土の下層に旧耕土層が２～３層（2.5Y5/3黄褐色粗砂～極細礫まじり極細砂～中砂、2.5Y5/4黄褐色粗砂～細礫まじりシルト～中砂、2.5Y5/6黄褐色粗砂～細礫まじり極細砂～中砂）ほど残る地点（第１調査区東側）と、現耕土の下層が地山となる地点である（第１調査区西側）。

その他に若干、旧耕土層が残る地点もある。この差異は、それぞれの時代の耕作地造成が、それ以前の耕作地割と異なるために起こったと考えられ、それにより旧耕土層の削られ度合いが違うという状況が生じたと推測される。また、第１調査区東側では、旧耕土層に、暗褐色シルト層と明黄褐色シルト層のブロック土（2.5Y4/3オリーブ褐色シルト～極細砂と2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト～極細砂と10YR5/3にぶい黄褐色シルト～極細砂のブロック土）が部分的にみられた。そして、この下層が地山面となる。このブロック土からは須恵器や土師器片が出土したため、遺構の検出は、この層を検出できる地山面で行う

こととした。第２調査区は旧耕土層直下が地山の部分が多く、旧耕土層及びその他の層に遺物は包含されていない（第３・４図）。なお各遺構内の断面については遺構各節で関連のあるものについて記述する。



第3図　調査区土層断面実測図（1/60）

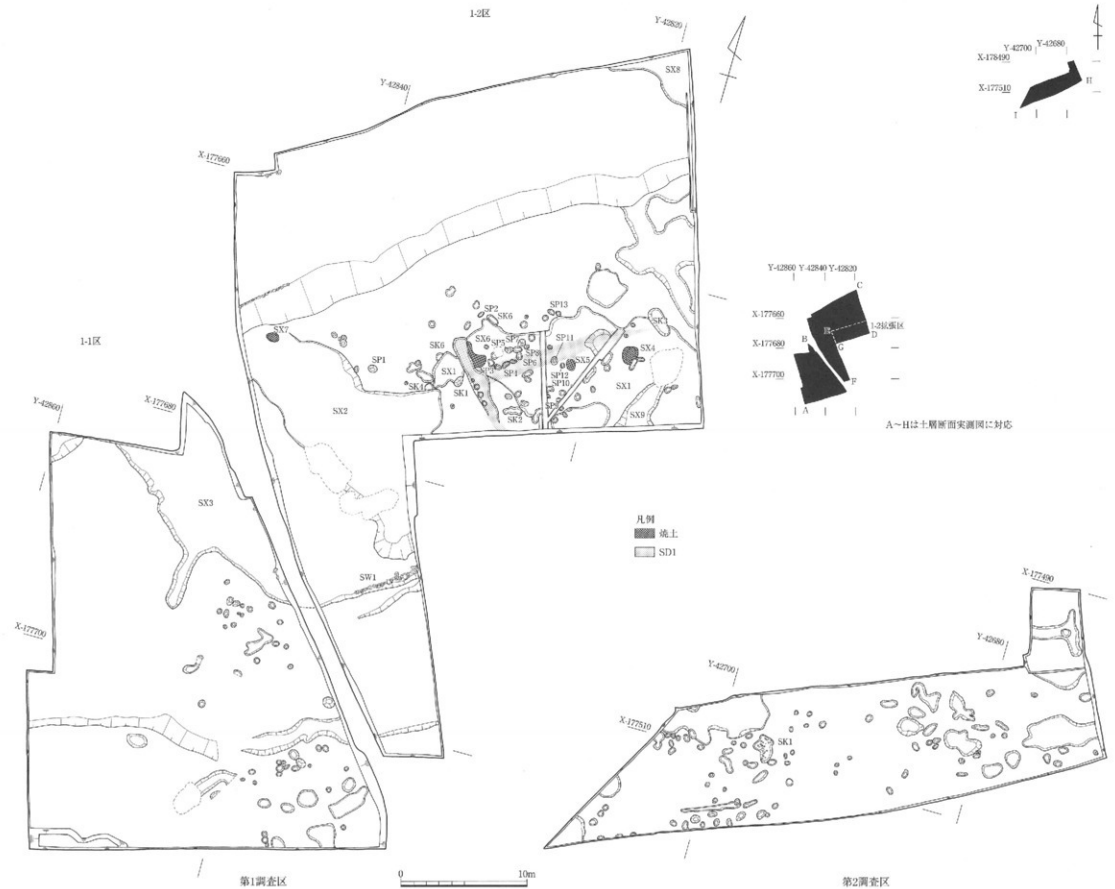


第1調査区
① 盛土
② 旧土
③ 10YR4/6褐色　シルト～埋砂に、10YR7/6明黄褐色　シルト～埋砂ブロック含む
④ 10YR5/6黄褐色　埋砂～細礫まじりシルト～中砂に、10YR4/2黒褐色　シルト～埋砂ブロック多く含む
⑤ 10YR4/2灰黄褐色　極粗砂～細礫まじりシルト粗砂（旧耕土）
⑥ 10YR4/4褐色　シルト～細礫（強く酸化している　SX3廃土）
⑦ 調査時盛土
⑧ 2.5Y3/3黄褐色　粗砂～細礫まじり極細砂～中砂（旧耕土）
⑨ 2.5Y4/4オリーブ褐色　粗砂～細礫まじりシルト～中砂（SX8廃土）
⑩ 2.5Y3/3黄褐色　極粗砂～細砂まじり極細砂～粗砂
⑪ 2.5Y3/4黄褐色　極粗砂～中礫まじり～粗砂
⑫ 10YR4/6褐色　中砂～極細礫まじり極細砂～細砂（酸化強い）
⑬ 2.5Y4/6オリーブ褐色　粗砂～細礫まじりシルト～中砂
⑭ 2.5Y3/3黄褐色　中砂～極粗砂まじり～極細砂　3～5cm大塊やや含む
⑮ 2.5Y4/6オリーブ褐色　粗砂～中礫まじり極細砂～中砂　3～5cm大塊多く含む（盛土、整地層か？）
⑯ 2.5Y3黄褐色　極粗礫まじり極細砂～極粗砂（旧耕土）
⑰ 2.5Y3/6黄褐色　中砂～極細礫まじりシルト～細砂　2～3cm大礫含む
⑱ 10YR5/6黄褐色　粗砂～極細礫まじり極細砂～中砂（やや酸化している）
⑲ 2.5Y3/3黄褐色　粗砂～極細礫まじり極細砂～中砂（旧耕土）
⑳ 2.5Y4/4オリーブ褐色　中砂～極細礫まじり極細砂～細砂（旧耕土）
㉑ 2.5Y3/4黄褐色　粗砂～細礫まじりシルト～中砂（旧耕土）
㉒ 10YR3/3暗褐色　中砂まじりシルト～細砂に、10YR6/6明黄褐色　シルトブロック　炭含む（人為的な埋積　SX1廃土）
㉓ 10YR3/3暗褐色　中砂～粗砂まじりシルト～細砂に、10YR4/4褐色　シルトブロック、炭含む（SX1廃土）
㉔ 10YR3/3暗褐色　中砂まじりシルト～細砂
㉕ 2.5Y3/3黄褐色　粗砂～極細礫まじり極細砂～中砂（旧耕土）
㉖ 2.5Y3/4黄褐色　粗砂～細礫まじりシルト～中砂（旧耕土）
㉗ 2.5Y3/6黄褐色　中砂～粗砂まじりシルトに、2.5Y3/2黒褐色シルト～細砂ブロック、2.5Y6/6　明黄褐色シルトブロック、炭を含む（人為的な埋積か？　SX2廃土）
㉘ 2.5Y3/6黄褐色　粗砂～細礫まじり極細砂～中砂（旧耕土）
㉙ 2.5Y3/3暗オリーブ褐色　細砂～中砂まじりシルト～極細砂、下部は2.5Y4/3オリーブ褐色　シルト～極細砂、炭含む（旧武士が残存している6層はこの層と地山層がブロック土として入っているもの　SX2廃土）
㉚ 2.5Y6/8明黄褐色　粗砂～細礫まじり極細砂～中砂　5～20cm大の塊含む（地山層を掘ったもの　現代の盛土と思われる）
㉛ 2.5Y3/4黄褐色　粗砂～細礫まじり極細砂～中砂（旧耕土）
㉜ 2.5Y3/3黄褐色　粗砂～極細礫まじり極細砂～中砂（旧耕土）
㉝ 2.5Y4/4オリーブ褐色　中砂～極細礫まじり極細砂～細砂（旧耕土）
㉞ 10YR4/6褐色　中砂～細礫まじりシルト～細砂（よく酸化している）
㉟ 2.5Y4/6オリーブ褐色　中砂～極細砂まじりシルト～細砂
㊱ 2.5Y4/6オリーブ褐色　中砂～極粗砂まじりシルト～細砂に、2.5Y6/8明黄褐色　シルト～細砂ブロック含む
㊲ 10YR4/4褐色　中砂まじりシルト～細砂に、10YR3/3暗褐色　シルトブロック、炭含む
㊳ 2.5Y4/2暗灰黄色　シルト～極細砂と、10YR5/3にぶい黄褐色シルト～極細砂のブロックに（SX9廃土）
㊴ 2.5Y5/2暗灰黄色　中砂シルト～極細礫まじり極細砂～細砂（SD1廃土）
㊵ 2.5Y5/2暗灰黄色　粗砂シルト～細礫まじり極細砂～中砂（SD1廃土）

第2調査区
① 2.5Y3/2黒褐色　中砂～極細礫まじりシルト～細砂（現代耕土）
② 2.5Y4/3オリーブ褐色　粗砂～極粗砂まじり極細砂～中砂（旧耕土）
③ 2.5Y4/4オリーブ褐色　粗砂～極細礫まじりシルト～中砂（旧耕土）
④ 2.5Y4/3オリーブ褐色　粗砂～極細礫まじりシルト～中砂（旧耕土）
⑤ 10YR3/4暗褐色　中砂～極細砂まじりシルト～細砂に、2.5Y5/6黄褐色　シルト～極細砂ブロック含む
⑥ 2.5Y5/6黄褐色　中砂～極細砂まじりシルト～細砂に、2.5Y6/6明黄褐色　シルトブロック含む
⑦ 10YR3/4暗褐色　中砂～粗砂まじりシルト～細砂　炭含む
⑧ 2.5Y5/3黄褐色　粗砂～極粗砂まじりシルト～中砂　炭含む（旧耕土）
⑨ 2.5Y6/6明黄褐色　シルト～細砂（地山層）非常にしまり悪い
⑩ 2.5Y4/4オリーブ褐色　粗砂～極細礫まじり極細砂～中砂（旧耕土）
⑪ 2.5Y4/4オリーブ褐色　粗砂～極細礫まじり極細砂～中砂

0　4m

第４図　調査区土層断面実測図（1/60）



第5図　調査区遺構配置図（1/300）

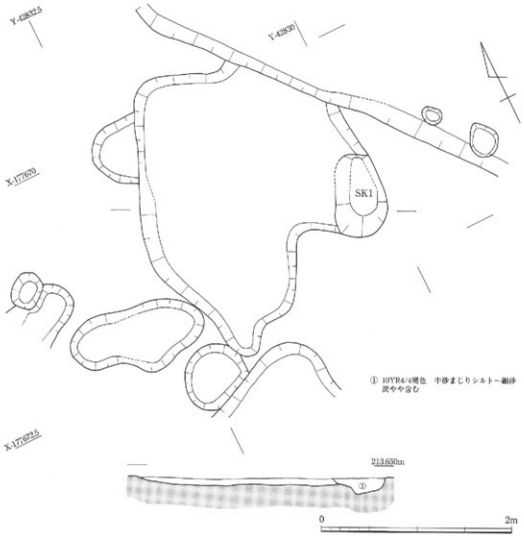
第３節　遺構と遺物

１．第１調査区（第５図）

トレンチは里道を挟んで２箇所に分け、西側を１-１区、東側を１-２区とし、南東部の拡張部分を１-２拡張区とした。第１調査区で検出した遺構は、土坑・溝・ピット・石垣・落ち込みなどである。石垣や溝は、旧耕土層に伴う遺構と考えられ、試掘調査で確認した石組遺構と関連すると思われる。時期は中世から現代にかけてのものである。ピットや土坑、落ち込みは、暗褐色シルト層や褐色シルト層が主体の埋土で、土師器や須恵器が多く出土し、古墳時代のものと考えられる。また、この落ち込みから縄文土器片も出土している。旧耕土層中からは、土師器や須恵器と共に瓦器も出土している。

（１）土坑

［ＳＫ１］（第６・７図、図版13）



第６図　ＳＫ１遺構実測図（1/40）

ＳＫ１は１-２拡張区西側に位置する。ＳＸ１埋没後に掘り込まれた土坑で、平面形態は楕円形である。規模は長径0.88m、短径0.53m、深さ0.16mを測る。埋土は１層で構成されており、10YR4/4褐色中砂まじりシルト～細砂、炭やや含むであった。

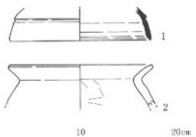
遺物は土師器甕、須恵器坏蓋（１）が出土した。いずれも小片であり、土師器甕は図化出来なかった。時期については布留式以降の古墳時代のものと思われる。

須恵器坏蓋（１）は口径約14.4cmに復元できた。口縁部、天井部間の稜はやや鈍く、小片のため明確ではないが、MT15型式と思われる。

［ＳＫ２］(第５図、第７図、図版13)

ＳＫ２は、ＳＫ１の南東4.2mに位置する。ＳＸ１埋没後に掘り込まれた土坑で、平面形態は不定形である。規模は長軸1.50m、短軸0.60m、深さ0.06mを測る。

遺物は土師器甕（２）が出土した。（２）は口径約14.4cmに復元できた。口縁部は体部からくの字に屈曲して開く。体部内面は板状工具によるナデ調整、外面は磨耗のため不明である。時期については布留式以降の古墳時代のものと思われる。

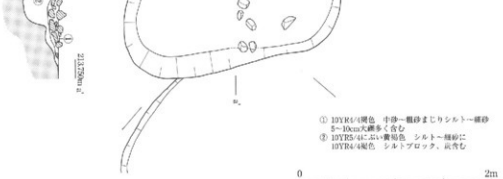


第７図　ＳＫ１・２出土遺物実測図

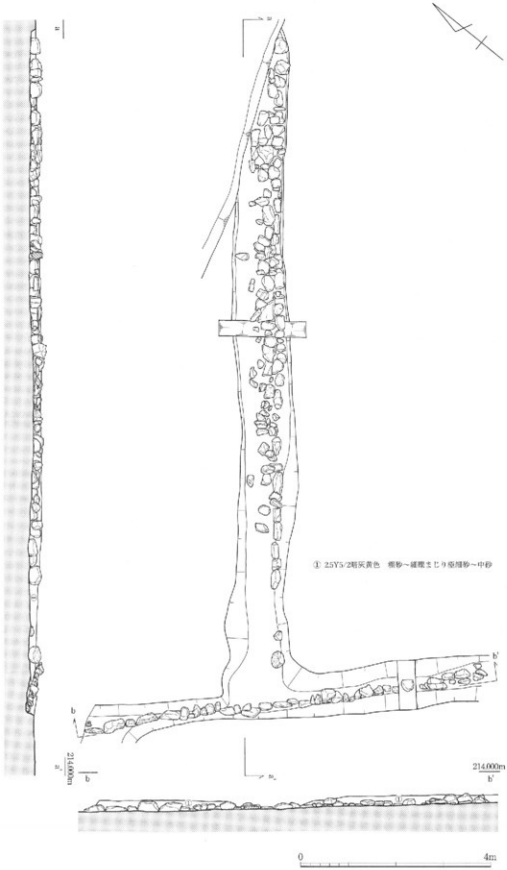
［ＳＫ３］(第８図)

ＳＫ３は１-２拡張区北東側に位置する。ＳＸ１埋没後に掘り込まれた土坑で、平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸2.28m、短軸1.40m、深さ0.40mを測る。埋土は２層で構成されており、下層から、10YR5/4にぶい黄褐色シルト～細砂に10YR4/4褐色シルトブロック、炭含む、10YR4/4褐色中砂～粗砂まじりシルト～細砂、大礫含むであった。

遺物は土師器甕の頸部片等が出土したが、小片のため図化出来なかった。時期については不明である。



第８図　ＳＫ３遺構実測図（1/40）



第10図　ＳＤ１遺構実測図（1/80）

［ＳＫ４］(第５図)

ＳＫ４は、ＳＫ１の北1.7mに位置する。ＳＸ１、ＳＸ２形成以前の土坑で、平面形態は楕円形である。規模は長径0.68m、短径0.57m、深さ0.05mを測る。埋土は１層で構成されており、10YR5/4にぶい黄褐色中砂まじりシルト～中砂であった。

遺物は土師器甕の体部片等が出土したが、小片のため図化出来なかった。時期については不明である。

［ＳＫ５］(第５図)

ＳＫ５は、ＳＫ４の北1.8mに位置する。ＳＸ１形成以前の土坑で、平面形態はＳＸ１に切られているが、楕円形と推察される。規模は短径0.57m、深さ0.06mを測る。埋土は１層で構成されており、10YR5/4にぶい黄褐色中砂まじりシルト～中砂で、ＳＫ４と同様の埋土であった。

遺物は土師器甕の体部片が出土したが、小片のため図化出来なかった。時期については不明である。

［ＳＫ６］(第５図)

ＳＫ６は、ＳＫ５の北東4.7mに位置する。ＳＸ１埋没後に掘り込まれた土坑で、平面形態は楕円形である。規模は長軸1.10m、短軸0.39m、深さ0.15mを測る。埋土は１層で構成されており、10YR4/4褐色シルト～細砂に、10YR3/1黒褐色シルトブロック、10YR6/6明黄褐色シルトブロック含むであった。

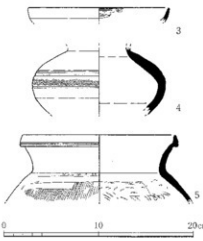
遺物は土師器甕の体部片、須恵器坏蓋の稜部片等が出土した。須恵器坏蓋は小片のため明確ではないが、TK23型式～TK47型式と思われる。いずれも小片のため図化出来なかった。

（２）溝

［ＳＤ１］(第９・10図、図版11・13)

ＳＤ１は１-２拡張区に位置する。規模は幅0.90m～1.20m、深さ0.22m、平面形態はＴ字形を呈する石組暗渠状の溝である。北西、南東方向のＴ字の頂部にあたる部分の長さ8.50m、それに直交する部分の長さ14.90mにわたり検出した。埋土は２層で構成されており、下層から2.5Y5/2暗灰黄色粗砂～細礫まじり極細砂～中砂、2.5Y5/2暗灰黄色中砂～極細礫まじり極細砂～細砂であった。

遺物は土師器甕、須恵器坏蓋、須恵器壺（４）、須恵器甕（５）、瓦器塊（３）等が出



第９図　ＳＤ１出土遺物実測図（1/80）

土した。状況から判断して土師器と須恵器は混入したものと考えられる。

須恵器壺（４）は底部と口頸部を欠損するが、胴部最大径は14.0cmである。胴部に櫛描波状文を施す。残存部で円孔が確認できないため壺とした。

須恵器甕（５）は口径約16.0cmに復元できた。体部外面に格子タタキ痕、内面に同心円状当具痕が残る。焼成はやや軟質である。（４）、（５）ともにTK23型式～TK47型式と思われる。

瓦器塊（３）は口径約14.8cmに復元できた。LI縁部内面に密なヘラミガキを施す。小片のため尾上編年による型式分類は不明である。

ＳＤ１は旧耕土層に伴う遺構と考えられ、瓦器塊（３）の時期以降のものと考えられる。

（３）遺物出土ピット

［ＳＰ１］(第５図)

ＳＰ１はＳＸ４の北西4.1mに位置する。規模は直径0.34m、深さ0.62m、平面形態は円形である。埋土は4層で構成されており、下層から、2.5Y5/3黄褐色中砂～極細砂まじりシルト～細砂、2.5Y6/6明黄褐色シルト～細砂に2.5Y3/2黒褐色シルトブロック含む、2.5Y3/2黒褐色中砂～極粗砂まじりシルト～細砂、2.5Y4/4オリーブ褐色中砂～極細礫まじり極細砂～細砂であった。

遺物は土師器が出土した。器種のわかる破片は１点で土師器甕の頸部であるが、小片のため図化出来なかった。時期については不明である。

土層は柱穴の様相を呈しているが、周囲に建物、柵列等を想定する遺構は存在しない。

［ＳＰ２］(第５図)

ＳＰ２はＳＫ６の北西0.4mに位置する。規模は長径0.50m、短径0.25m、深さ0.06m、平面形態は楕円形である。埋土は１層で構成されており、10YR3/3暗褐色中砂まじりシルト～細砂に、10YR6/6明黄褐色シルトブロックやや含むであった。

遺物は土師器甕の体部片が１点出土した。内、外面ともにハケ調整を施す。小片のため図化出来なかった。時期については不明である。

［ＳＰ３］(第５図)

ＳＰ３はＳＰ２の南3.6mに位置する。規模は長径0.55m、短径0.14m、深さ0.08m、平面形態は不定形である。埋土は１層で構成されており、10YR4/4褐色シルト～細砂に、10YR3/1黒褐色シルトブロック、10YR6/6明黄褐色シルトブロック含むであった。

遺物は土師器が３点出土した。いずれも甕の体部小片で図化出来なかった。時期については不明である。

［ＳＰ４］(第５図)

ＳＰ４はＳＰ３の東0.7mに位置する。規模は長径0.66m、短径0.31m、深さ0.08m、平面形態は不定楕円形である。埋土は１層で構成されており、10YR3/3暗褐色中砂まじりシル

ト～細砂に10YR6/6明黄褐色シルトブロック含むであった。

遺物は器種不明の土師器片が２点出土したが、小片のため図化出来なかった。時期については不明である。

［ＳＰ５］(第５図)

ＳＰ５はＳＰ４の北0.7mに位置する。規模は長径0.70m、短径0.45m、深さ0.20m、平面形態は不定楕円形である。埋土は１層で構成されており、10YR3/3暗褐色中砂まじりシルト～細砂に、10YR4/4褐色シルトブロック、10YR6/6明黄褐色シルトブロック、炭含むであった。

遺物は土師器壺の体部片が出土した。布留式以降の古墳時代のものと思われるが、小片のため図化出来なかった。

［ＳＰ６］(第５図)

ＳＰ６はＳＰ５の東0.4mに位置する。規模は長径0.50m、短径0.45m、深さ0.20m、平面形態は楕円形である。埋土は１層で構成されており、10YR4/4褐色シルト～細砂に、10YR3/1黒褐色シルトブロック、10YR6/6明黄褐色シルトブロック含むであった。

遺物は土師器が２点出土した。うち器種の判別がつくのが甕の体部片で、内面にケズリ、外面にハケ調整を施す。小片のため図化出来なかった。時期については不明である。

［ＳＰ７］(第５図)

ＳＰ７はＳＰ６の北0.4mに位置する。規模は長径0.56m、短径0.48m、深さ0.17m、平面形態は不定楕円形である。埋土は１層で構成されており、10YR3/3暗褐色中砂まじりシルト～細砂に、10YR4/4褐色シルトブロック、10YR6/6明黄褐色シルトブロック、炭含むであった。

遺物は土師器壺、甕の体部片が出土したが、小片のため図化出来なかった。時期については不明である。

［ＳＰ８］(第５図)

ＳＰ８はＳＰ７の東に隣接する。規模は直径0.28m、深さ0.18m、平面形態は円形である。埋土は１層で構成されており、10YR4/4褐色シルト～細砂に、10YR6/6明黄褐色シルト～細砂ブロック含むであった。

遺物は土師器と須恵器坏身受部片が出土したが、小片のため型式は不明で図化出来なかった。

［ＳＰ９］(第５図)

ＳＰ９はＳＫ２の北東2.1mに位置する。規模は検出長径0.28m、短径0.20m、深さ0.12m、平面形態は楕円形である。埋土は１層で構成されており、10YR4/4褐色シルト～細砂に、10YR6/6明黄褐色シルト～細砂ブロック、炭含むであった。

遺物は須恵器坏蓋の口縁部片が出土した。小片のため型式は不明で図化出来なかった。

［ＳＰ10］(第５図)

ＳＰ10はＳＰ９の北に隣接する。規模は検出長径0.54m、短径0.42m、深さ0.06mで、平面形態は楕円形である。埋土は１層で構成されており、10YR4/4褐色シルト～細砂に、10YR3/1黒褐色シルトブロック、10YR6/6明黄褐色シルトブロック含むであった。

遺物は土師器甕の体部片が出土したが、小片のため図化出来なかった。時期については不明である。

［ＳＰ11］（第５図）

ＳＰ11はＳＰ10の北1.7mに位置する。規模は直径0.45m、深さ0.13m、平面形態は円形である。埋土は１層で構成されており、10YR3/3暗褐色中砂まじりシルト～細砂に10YR6/6明黄褐色シルトブロックやや含む、炭含むであった。

遺物は土師器が３点出土したが、器種不明の小片のため図化出来なかった。時期については不明である。

［ＳＰ12］（第５図）

ＳＰ12はＳＫ11の東に隣接する。規模は直径0.38m、深さ0.08m、平面形態は円形である。埋土は１層で構成されており、10YR3/3暗褐色中砂まじりシルト～細砂に10YR6/6明黄褐色シルトブロックやや含む、炭含むであった。

遺物は土師器甕の体部片が出土したが、小片のため図化出来なかった。時期については不明である。

［ＳＰ13］（第５図）

ＳＰ13はＳＰ11の北3.3mに位置する。規模は長径0.49m、短径0.27m、深さ0.03m、平面形態は楕円形である。埋土は１層で構成されており、10YR5/6黄褐色中砂～粗砂まじりシルト～細砂であった。

遺物は土師器甕の体部片が出土したが、小片のため図化出来なかった。時期については不明である。

（４）石垣状遺構

［ＳＷ１］（第５図）

ＳＷ１はＳＸ２の南端の南側に位置する、南西、北東方向に伸びる石垣状遺構である。石積みは基底石と２段目の一部がトレンチ東壁から南西へ5.80m残存する。旧耕土層に伴う遺構で、耕作地の地割界を示す段と考えられる。

遺物は土師器が３点出土したが、器種不明の小片のため図化出来なかった。

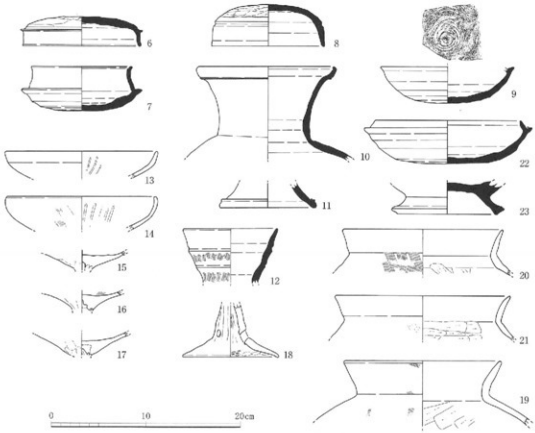
（５）落ち込み状遺構

［ＳＸ１］古墳時代の落ち込み（第５・11・16図、図版10・11・12）

ＳＸ１は1-2拡張区に位置する落ち込み状遺構である。東西に長く、その規模は長さ17m以上、幅約10m、深さ約0.2mを測る。平面形態は不定形である。埋土は１層で構成さ

れており、10YR3/3暗褐色中砂まじりシルト～細砂に10YR6/6明黄褐色シルトブロック、炭を含むであった。人為的に埋められた堆積と考えられる。

遺物は古墳時代の須恵器、土師器が多く出土した。須恵器坏蓋（6）は口径12.3cm、器高3.1cmである。天井部は低く扁平で、静止ヘラケズリを施す。稜は比較的鈍いが、端部は短く外上方へのびる。口縁部は僅かにハの字形に外反し、端部は丸く仕上げられている。須恵器坏身（7）は口径10.5cm、器高4.6cmである。たちあがりの高さは器高のほぼ1/2で、底部は扁平である。たちあがりは内傾し、端部は外反して開き、内側に僅かに段を持つが、丸く仕上げている。回転ヘラケズリは受部に近い所にまで及ぶ。型式、胎土からみて愛知県名古屋市東部に所在する東山窯産と考えられ、東山111号窯出土のものに型式が類似する。（6）の胎土も同様で、東山48号窯のものに型式が類似する。これらの特徴から（6）、（7）はＴＫ216型式併行期～ＯＮ46型式併行期と考えられる[註2]。須恵器坏蓋（8）は口径11.8cm、器高4.4cmである。天井部は丸みを帯び、静止ヘラケズリを施す。稜部分は凹線状を呈し、端部は突出していないが鋭い。口縁端部は内側に段を持たず、丸く仕上げている。胎土は（6）、（7）と同様であることから東山窯産で、ＴＫ216型式併行期～ＯＮ46型式併行期と考えられる。



第11図　ＳＸ１出土遺物実測図

（9）～（21）はＳＸ１の形成に伴う土器群である。（9）～（12）は須恵器で、須恵器坏身（9） は口縁部を欠損するが、受部径約14.0cmに復元できた。底部内面に同心円状の当て具痕が残る。この痕跡はヨコナデを切っており、成形後に付いたものである[註3]。回転ヘラケズリの方向は時計回りである。須恵器壺（10）は口径14.1cmである。口縁部は外面下部に稜を持ち、端部は内側へ短く屈曲する。須恵器高坏（11）は脚裾部径約10.0cmに復元できた。低脚で裾上部に稜を持つ。須恵器直口壺（12）は口径9.8cmである。頸部に２条の稜で文様帯を区切り、櫛描波状文を２帯施す。これらの須恵器はＴＫ23型式と考えられる。

（13）～（21）は土師器である。（13）～（18）は高坏で（13）、（14）は共に口径約15.8cmに復元できた。内面には僅かに暗文が観察できる。（15）～（17）はいずれも脚部接合部分で欠損する。（18）は脚台部で、脚柱部に面取りを施し、３方に外側から円孔を穿ち透かしとしている。（19）～（21）は甕である。（19）は口径約16.1cmに、（20）は口径約16.7cmに、（21）は口径約18.3cmに復元できた。いずれも、体部外面ハケ調整、内面頸部以下をケズリ調整する。これらの土師器はＴＫ23型式併行期であると考えられる。

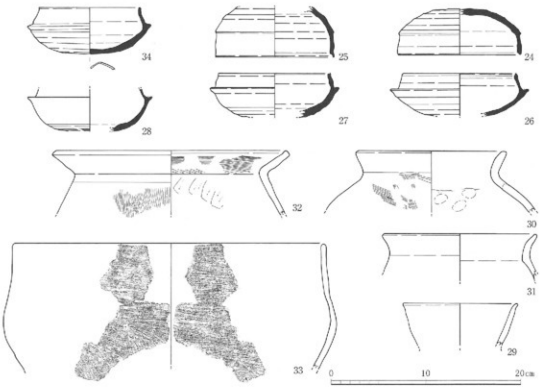
須恵器坏身（22）は口径約15.3cmに復元できた。TK43型式と考えられる。須恵器台付長頸壺（23）は底径10.5cmである。脚台部のみであるが、７世紀前半代としておきたい。

ＳＸ１は前述したように人為的に埋められており、またその行為は堆積状況から一度に行われたと考えられ、その覆土にＴＫ23型式の須恵器、その併行期の土師器が包含されている。以上の事を踏まえると、（6）～（8）はＳＸ１形成以前の遺物の混入、(22)、(23) はＳＸ１埋没後の遺物の混入であると理解することが可能である。よってＳＸ１を形成した行為はＴＫ２３型式の時期に行われたと考えたい。

［ＳＸ２］古墳時代の落ち込み（第６・12・16図、図版11・12）

ＳＸ２は１-２区東側に位置する落ち込み状遺構である。南北に長く、規模は長さ約14m以上、幅約８m以上、深さ約0.2mを測る。平面形態は不定形である。埋土は１層で構成されており、2.5Y5/6黄褐色中砂～粗砂まじりシルトに2.5Y3/2黒褐色シルト～細砂ブロック、2.5Y6/6明黄褐色シルトブロック、炭を含むであった。ＳＸ１と同様の状況で人為的に埋められた堆積と考えられる。

遺物は古墳時代の須恵器、土師器が多く出土し、縄文土器、古代の土師器も出土した。縄文土器深鉢（33）は口径約32.6cmに復元できた。口縁部は、胴部から緩やかに屈曲して僅かに外反気味に開く。外面の巻貝条痕調整は顕著で、胴部を縦方向に調整した後、口頸部を横方向に調整している。また、口縁部上端面にも条痕が残る。内面は横方向の調整を行っている。これらの特徴から、縄文時代後期後半の型式である元住吉山Ⅱ式の粗製土器に相当すると考えられる。須恵器坏身（34）は口径10.6cm、器高4.9cmである。底部は丸みを帯び、たちあがりは内傾し、端部は丸く仕上げている。回転ヘラケズリは受部に近い所にまで及び、方向は時計回りである。受部の稜はやや鈍く、断面三角形で



第12図　ＳＸ２出土遺物実測図

ある。底部外面にヘラ記号をもつ。ＴＫ216型式よりもＯＮ46型式に近いと考えられる。土師器甕（32）は口径約24.0cmに復元できた。口縁部は、体部から外方へくの字に屈曲して直線的に開き、端部は内側が僅かに肥厚する。口縁部内面に横方向のハケ調整、体部外面に縦方向のハケ調整を施す。体部内面はケズリ調整である。時期については古代のものとしておきたい。

（24）～（31）はＳＸ２形成に伴う土器群である。（24）～（28）は須恵器で、須恵器坏蓋（24）は口径12.8cmである。天井部は丸みを帯び、回転ヘラケズリは稜に近い所にまで及ぶ。口縁端部は内傾する段をもつが、やや鈍い。須恵器坏蓋（25）は口径約12.4cmに復元できた。天井部は丸みを帯び、口縁端部は内傾する明瞭な段を持つ。焼成はやや軟質である。須恵器坏身（26）は口径約11.4cmに復元できた。底部は丸みを帯び、たちあがりは内傾する。口縁端部は内傾する段を持つ。回転ヘラケズリは受部に近い所にまで及ぶ。須恵器坏身（27）は口径約11.6cmに復元できた。底部は丸みを帯び、たちあがりは僅かに内傾する。口縁端部はやや内傾する面を持つが、段は明瞭ではない。須恵器坏身（28）は受部径約13.0cmに復元できた。底部は丸みを帯び、回転ヘラケズリは体部の1/3以下であるが、方向は時計回りである。端部は欠損するが、たちあがりは内傾し、器壁は薄い。これらの須恵器はＴＫ23型式と考えられる。

（29）～（31）は土師器である。土師器壺（29）は口径約11.4cmに復元できた。口縁部は、頸部から内湾気味に開き、端部は僅かに外反する。土師器甕（30）は口径約15.2cmに復元できた。口縁部は、体部から緩やかに屈曲して開く。体部外面ハケ調整、

内面は指ナデ調整を施す。土師器甕（31）は口径約15.8cmに復元できた。口縁部は外反気味に開く。頸部以下体部内面はケズリ調整後にナデを施す。これらの土師器はＴＫ23型式併行期と考えられる。

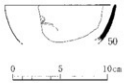
ＳＸ２はＳＸ１と同様に人為的に埋められており、状況的に同じ性格、同時期の遺構であると考えられる。（33）の縄文土器、（34）の須恵器坏身はＳＸ２形成以前の遺物の混入、（32）の土師器甕はＳＸ２埋没後の遺物の混入であると理解したい。

［ＳＸ３］近世の落ち込み（第５図、第13図、図版13）

ＳＸ３は１-１区北東端に位置する落ち込み状の遺構である。規模は北西、南東方向に伸びる肩部分19.15m、幅6.85m、にわたり検出し、深さは最大で0.64mを測る。平面形態は不定形である。埋土は上層部分の３層が現代の石垣構築時の盛土で、その直下の旧耕土層以下がオリジナルの堆積で、２層で構成されている。下層から2.5Y4/4オリーブ褐色中砂～極細礫まじりシルト～細砂、2.5Y4/3オリーブ褐色極細砂～中礫であった。

遺物は肥前磁器染付碗（50）が出土した。体部は内湾して開く。内面回転ナデ、外面回転ケズリ成形で、呉須にて外面に草花文を絵付け後、内、外面に透明釉を施す。概ね18世紀前半と考えられる。

ＳＸ３の肩のラインは１-２区のＳＷ１の肩とつながるものと思われ、ＳＸ３も同様に耕作地の地割界を示す段と考えられ、これらの耕作地造成は18世紀前半以降のものである。



第13図　ＳＸ３出土遺物実測図

（６）焼土

［ＳＸ４］（第５・16図）

ＳＸ４はＳＫ３の南西2.4m、ＳＸ１に内に位置する焼土である。規模は長径1.40m、短径1.00m、平面形態は楕円形である。検出面が若干焼けている程度の遺構で、ＳＸ１に関連するものと考えられる。遺物の出土はない。

［ＳＸ５］（第５・16図）

ＳＸ５はＳＸ４の西3.7m、ＳＸ１内に位置する焼土である。規模は長径0.85m、短径0.69m、平面形態は楕円形である。上面及び周辺から多くの炭が出土した。ＳＸ１に関連するものと考えられる。遺物の出土はない。

［ＳＸ６］（第５・16図）

ＳＸ６はＳＸ５の西6.4m、ＳＸ１内に位置する焼土である。規模は西側部分をＳＤ１に切られ、残存部分で南北1.40m、東西1.00m、平面形態は不定形である。検出面が若干焼けている程度の遺構で、ＳＸ１に関連するものと考えられる。遺物の出土はない。

［ＳＸ７］（第５・16図）

ＳＸ７はＳＸ２内の北端に位置する焼土である。規模は長径0.93m、短径0.69m、平面形態は楕円形である。焼土の層厚は最大0.05mを測る。ＳＸ２に関連するものと考えられ

る。遺物の出土はない。

（7）不明遺構

［ＳＸ８］（第５図）

ＳＸ８は1-2区北東隅に位置する。浅い落ち込み状の遺構で、規模は肩部分6.96mを検出し、深さ0.05mを測る。平面形態は不定形である。

遺物は土師器の甕口縁部、体部等が出土した。布留式以降の古墳時代のものと思われるが、小片のため図化出来なかった。

［ＳＸ９］（第５図）

ＳＸ９はＳＸ４の南３mに位置する。検出部分では南北方向に伸びるＳＸ１埋没後に掘り込まれた溝状の遺構である。規模は長さ3.60m、幅1.74m、深さ0.15mを測る。

遺物は土師器の甕口縁部～体部片が出土した。口縁部は、体部から鋭く外方へ屈曲して僅かに内湾気味に開く布留式の系譜を引く形態のものであるが、小片のため図化出来なかった。

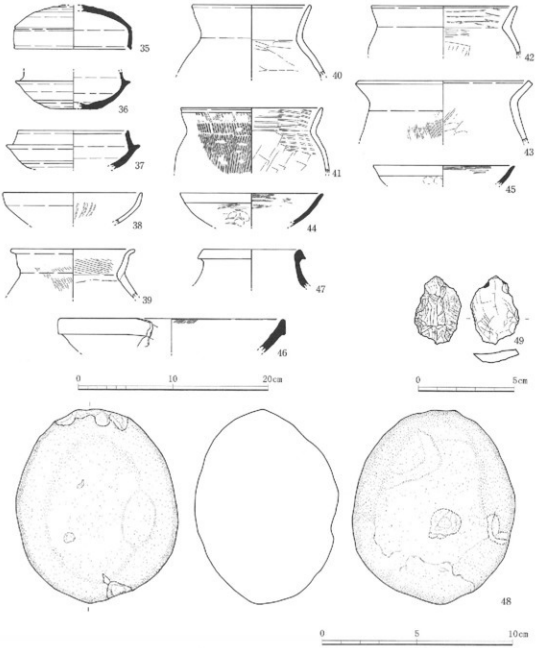
（8）包含層（第14図、図版11・13）

包含層からは砂岩製敲石（48）、サヌカイト剥片（49）、須恵器蓋坏（35）～（37）、土師器高坏（38）、土師器甕（39）～（43）、瓦器埦（44）、（45）、土師質捏鉢（46）、瀬戸美濃陶器壺（47）が出土した。

砂岩製敲石（48）は川原石を利用したものである。全長10.2cm、幅8.5cm、厚さ7.5cm、重さ803.5gである。敲打痕は先端部分と両面に残存する。時期については不明である。サヌカイト剥片（49）は全長3.6cm、幅2.3cm、厚さ0.4cm、重さ3.75gである。背面は原礫面と複数の剥離面からなる。風化が著しいが、時期は不明である。

須恵器坏蓋（35）は口径約12.0cmに復元できた。天井部は丸みを帯び、口縁端部は内傾する段を持つ。天井部に重ね焼きの痕跡が残る。須恵器坏身（36）は受部径約16.0cmに復元できた。たちあがりは端部を欠損するが内傾し、器壁は薄い。須恵器坏身（37）は口径11.4cmである。たちあがりはやや上向きの受部から内傾し、端部は内傾する段を持つ。（35）～（37）はＴＫ23型式～ＴＫ47型式と考えられる。

土師器高坏（38）は口径約14.4cmに復元できた。内面には僅かに暗文が観察できる。土師器甕（39）は口径約12.6cmに復元できた。口縁部は、体部から屈曲して開き、端部は外反する。口縁部内面及び体部外面にハケ調整を施す。土師器甕（40）は口径約12.0cmに復元できた。体部内面はナデの痕跡が確認できるが、器表面の剥離のため調整は不明である。土師器甕（41）は口径約14.4cmに復元できた。口縁部は、体部から緩やかに屈曲して開く。外面は、口縁部にまで及ぶ粗い縦方向のハケ調整、内面は、口縁部から頸部にかけて横方向の粗いハケ調整のち体部に板状工具によるナデを施す。土師器甕



第14図　包含層出土遺物実測図

(42) は口径約15.5cmに復元できた。口縁部内面に横方向の粗いハケ調整、体部内面にケズリを施す。土師器甕 (43) は口径約17.6cmに復元できた。口縁部は、体部から緩やかに屈曲して開き、端部は外傾する面を持つ。体部外面ハケ調整、内面に板状工具によるナデを施す。

瓦器埦 (44) は口径約14.8cmに復元できた。口縁部内面に密なヘラミガキを施す。体部外面にもヘラミガキがみられる。瓦器埦 (45) は口径約14.6cmに復元できた。口縁部内面に密なヘラミガキを施す。(44)、(45) 共に尾上編年のⅢ—2期に相当すると考えられる。

土師質捏鉢 (46) は口径約23.3cmに復元できた。口縁部は片口を持つ。時期について

は15世紀代のものと考えたい。

瀬戸美濃陶器壺（47）は口径約10.0cmに復元できた。内、外面に鉄釉を施す。瀬戸美濃大窯以降のものと考えたい[注4]。

2．第２調査区（第５図）

第２調査区ではピットや土坑などを検出したが、遺構に伴う遺物が全くなく、時期は不明である。検出した遺構は旧耕土層に伴うものと考えられ、耕作地を造成した時期と合致すると思われるが、同層からの遺物の出土はなく、詳細は不明である。このような状況から推測すると、検出した遺構は耕作に伴うものと考えられる。

（１）土坑

［ＳＫ１］（第15図）

調査区中央より西寄り、北壁の南4.5mに位置する土坑である。規模は長軸2.00m、短軸1.22m、深さ0.11m、平面形態は不定形である。埋土は１層で構成されており、10YR4/6褐色中砂～極細礫まじり極細砂～細砂（５～10cm大礫多く含む）であった。石を廃棄したような状況と考えられる。

遺物の出土はない。

第15図　ＳＫ１遺構実測図（1/40）

3．古墳時代の落ち込み状遺構ＳＸ１・ＳＸ２と焼土について(第16図)

第１調査区１-２区で検出した落ち込み状遺構であるＳＸ１、ＳＸ２の遺構内及びその周辺からは、多くのピットが検出された。その中に、焼土の範囲が４箇所確認できた（ＳＸ４～ＳＸ７)。ＳＸ１内のＳＸ５周辺からは炭が多く出土し、ＳＸ２内のＳＸ７は焼土の層厚が最大５cmあった。ＳＸ４、ＳＸ６は検出面が焼けている程度であった。これらの焼土の性格は不明であるが、検出した状況からは、周囲よりも地形的に若干落ち込んでいる所で、焼土を遺した焼成行為をおこなった後、人為的に埋められたものということが理解できる。出土土器は、その時同時に埋められたと考えられ、その行為の目的が問題である。これらの物理的な行為から推測される可能性としてはさまざまな状況が考えられ、また、焼土を遺した焼成行為と埋めた行為との相互関連の組み合わせを考慮すれば絞り込むことはできない。

焼成行為と埋めた行為は状況から同一目的のためにおこなわれたと考えられることから、これらの焼かれた時期は、落ち込み状遺構出土の遺物と同時期、５世紀後半頃と考えられる。

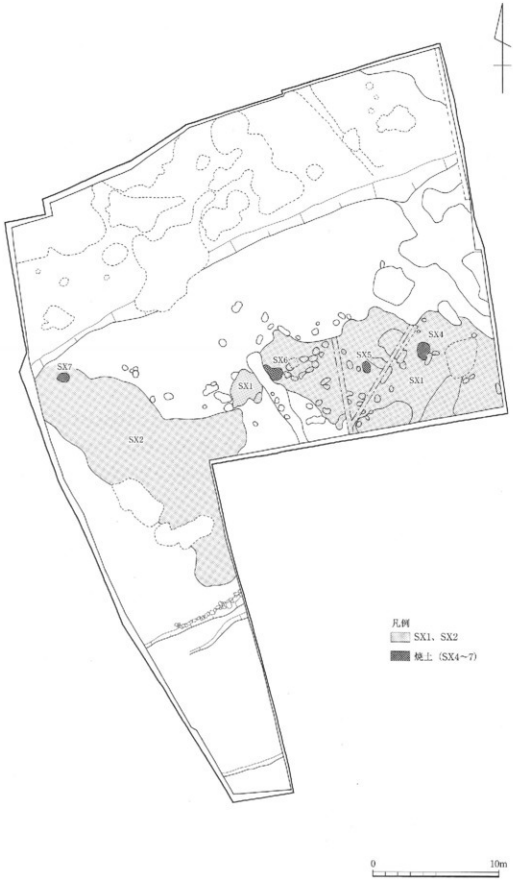
類例として、同時期、同状況の行為に伴う遺構の検出例は現時点で精査することはできていない。また、物理的な行為による状況のみで考える必要性がある。よってあくまでも参考資料として、焼成行為は伴わないが、類似した遺構の報告を１例あげておきたい。

奈良県桜井市大字三輪に所在する三輪遺跡の第８次調査で検出された落ち込み状遺構（ＳＸ－1005）についての報告である[注5]。この遺構のおもな埋土は地山ブロックを多量に含む層で構成されている。

遺物は５世紀末から６世紀前半代におさまる時期の須恵器、土師器が出土しており、三輪山山麓での４世紀後半に始まった祭祀に関連するものと報告されている。しかし同報告では、人為的に埋められたとは考察されておらず、本来磐座に供献されていた土器などが巨石（磐座）の移動とともに周囲に散乱し、落ち込み内に入りこんだものと報告されている。

焼成行為については、さまざまな可能性が考えられるため、その目的が不明である以上、類例を集成することは難しい。

今後、現時点で精査しきれていない類例を調査する必要があると同時に、物理的な行為により遺された資料以外の部分において、当時の実態を復元するには、関連するさまざまな分野からもアプローチする必要性がある。



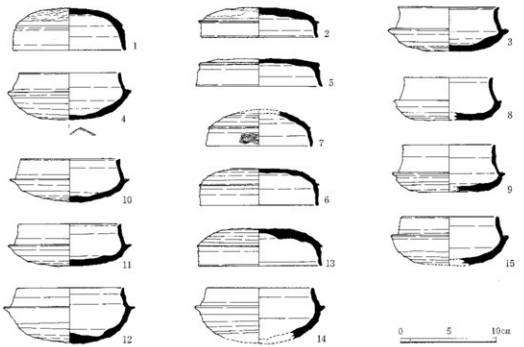
第16図　ＳＸ１・ＳＸ２遺構配置模式図（1/300）

4．ＳＸ１・ＳＸ２出土の初期須恵器について（第17図）

今回ＳＸ１・ＳＸ２から出土した初期須恵器については、出土状況及び型式学的な見解からこれらの遺構の形成以前の遺物の混入と考えた。しかしながら、今回の資料については、須恵器生産初期段階においての東海地方の須恵器の生産地である東山窯産のものが含まれており、今後の初期須恵器の生産・流通・消費の動向を研究する上で重要な資料と考えられる。また、今回の調査地は山間部に立地しており、この時期の通常の集落遺跡とは考え難く、どのような目的をもってこの地へ運ばれたのかということも含めて検討しなければならないが、物質的遺物のみをもって考察するには同様な資料の蓄積を待たなければならない。

以上のことから、陶邑及び東山窯出土須恵器の型式分類上の比較検討は『韓式系土器研究Ⅲ』の論考[注8]に譲ることとするが、今後の研究のための一資料として紹介しておきたい。

今回滝尻遺跡の調査ではＴＫ216型式期～ＯＮ46型式期の蓋坏が４点出土した。その内、（１）～（３）の坏蓋２点、坏身１点が、胎土、整式の特徴から名古屋市東部の東山窯産であると考えられる。特に（３）の坏身は、尾張型須恵器[注9]と呼称されるものの中ではその特徴的な形態のものである。（４）の坏身は陶邑窯産でＯＮ46型式と考えられ、同時期の東山窯産と陶邑窯産のものが混在している状況である。



第17図　滝尻遺跡出土須恵器と陶邑・東山窯出土須恵器[注10]

（１～４：滝尻遺跡、５・６：東山48号窯跡、７～９：東山111号窯跡、10～12：ＯＮ46号窯跡、13～15：ＴＫ216号窯跡）

これらの出土須恵器のもつ問題提起を、以下に資料紹介として観察を記して今後の課題を検討したい。

（1）～（3）は東山窯産と考えられる蓋坏である。須恵器坏蓋（1）は口径11.8cm、器高4.4cmである。天井部は丸みを帯び、静止ヘラケズリを施す。稜部分は凹線状を呈し、端部は突出していないが鋭い。口縁端部は内側に段を持たず、丸く仕上げている。天井部見込みは、ヨコナデ後不定方向のナデで仕上げている。胎土は東山窯産特有の黒色粒を多く含み、色調は暗灰色で、焼成は良好である。須恵器坏蓋（2）は口径12.3cm、器高3.1cmである。天井部は低く扁平で、静止ヘラケズリを施す。稜は比較的鈍いが、端部は短く外上方へのびる。口縁部は僅かにハの字形に外反し、端部は丸く仕上げられている。天井部見込みは、ヨコナデ後不定方向のナデで仕上げている。胎土は東山窯産特有の黒色粒を含むが、若干茶色気味に発色している。色調は明灰色で、焼成は良好である。東山48号窯出土のものに型式が類似する。須恵器坏身（3）は尾張型の形態的特徴をよく示している。口径10.5cm、器高4.6cmである。たちあがりの高さは器高のほぼ1/2で、底部は扁平である。たちあがりは内傾し、端部は外反して開き、内側に僅かに段を持つが、丸く仕上げている。回転ヘラケズリは受部に近い所にまで及ぶ。見込みは、ヨコナデ後不定方向のナデで仕上げている。胎土は東山窯産特有の黒色粒を多く含み、色調は明灰色で、焼成は良好である。東山111号窯出土のものに型式が類似する。（1）～（3）はＴＫ216型式併行期～ＯＮ46型式併行期であると考えられる。

須恵器坏身（4）は、口径10.6cm、器高4.9cmである。底部は丸みを帯び、たちあがりは内傾し、端部は丸く仕上げている。回転ヘラケズリは受部に近い所にまで及び、方向は時計回りである。受部の稜はやや鈍く、断面三角形である。底部外面にヘラ記号をもつ。胎土は陶邑窯産の特徴を示しており、焼成は良好であるが、色調は灰色～明黄褐色、受部は赤褐色の部分もある。ＯＮ46型式と考えられる。

以上、個々の蓋坏について観察を述べた。今回滝尻遺跡から出土したこれらの初期須恵器については、陶邑窯から、もしくは周辺の生産窯からの供給が通常想定されるにもかかわらず、尾張南部地域の東山窯産のものが出土した。伊藤氏の論考中[信9]で、「最大の須恵器生産地である陶邑と全く没交渉ではなかったにせよ、尾張南部地域は他地域と異なり、陶邑と個別に初期須恵器生産をおこない、尾張型須恵器を創りだした。何故それが可能であったのか、どのような歴史的意味があるのかが新たな課題である。」と述べている。

陶邑窯産、もしくは周辺の生産窯産の須恵器消費地想定内の滝尻遺跡からこの尾張型須恵器が出土した事実は、須恵器生産初期段階での生産・流通・消費も含め従来からの研究を踏まえた上での転換期となる一例ではないであろうか。単なる偶然の例外ではなく、新たな資料の蓄積に期待したい。

第3章　まとめ

今回の調査では、多くの遺構や遺物が確認できたが、遺跡の性格については不明な点が多い。平成12年度の調査[注1]でも、遺物としては今回の調査と同様に縄文土器、土師器、瓦器などが出土している。

遺構については耕作に伴う中世以降の溝や石垣（ＳＤ１・ＳＷ１）、古墳時代の落ち込み状遺構（ＳＸ１・ＳＸ２）を検出した。縄文時代、古代については遺構として検出されなかった。

しかしながら、縄文時代において石川上流域で確認されている遺跡は前期の高向遺跡[注6]、対岸で竪穴住居が確認されている中期末の宮山遺跡[注7]、それより0.5km上流の石器散布地である高木遺跡であるが、更に3.5km上流の滝畑地域においても前回調査と同様に縄文土器が出土したことから、縄文時代後期から晩期にかけての遺跡が存在する可能性が高くなった。

古墳時代の遺物としては、落ち込み状遺構から出土した須恵器に、混入遺物と理解しているが初期須恵器が含まれている。これらの須恵器の中にはＯＮ46型式のものと、愛知県東山窯産と考えられるＴＫ216型式併行期～ＯＮ46型式併行期のものがある。このことは、須恵器生産開始直後の陶邑窯産以外の多元的な須恵器供給を考える上で、貴重な資料となった。

古墳時代の遺構については今回当地域では初めて確認することができた。古墳時代の落ち込み状遺構の形成時期はＴＫ23型式の時期と考えられる。人為的な行為によって形成されていることは確実である。以下に状況を整理して、考察を試みる。

①山間部に位置し、石川支流である横谷川と石川の合流部分の河岸段丘上に立地している。

②古墳時代の消費行為と直接かかわりをもつ集落としては、狭小な立地からみて考えにくく、生産行為とも直接かかわりをもつ状況とは思われない。

③人為的な掘削（推測）、もしくは地形的に周囲よりも落ち込んでいる場所でおこなわれている。

④埋めた行為と焼成行為は同時期におこなわれたと考えられる。

⑤④の行為に伴って埋められた土器群は、これらの行為をおこなった時期のものと考えられる。

①～⑤までの状況から、行為の物理的復元においてのみ、当時の実態を把握することは可能であるが、精神的、宗教的行為を復元もしくは推定することは困難である。このような行為の意味は人間の観念上の問題であるため、物質的な遺物を資料として情報を引き出すことには限界がある。また、混入遺物であるが、初期須恵器の出土の意味は上記のこと

も含めて、この地域における古墳時代の遺跡の性格を考える上で重要である。

今回まとまって確認された古墳時代の落ち込み状遺構や焼土を含めた遺構群については、この頃の遺跡が当該遺跡のような山間地に立地している例は市内では存在せず、また狭小な立地を踏まえると、通常の集落跡と考えるには不自然である。今後、周辺遺跡だけではなく、類例調査も考慮して広い視野で遺跡の性格を考察する必要がある。

註1　『河内長野市埋蔵文化財調査報告書XXII　滝尻遺跡』河内長野市教育委員会　河内長野市遺跡調査会　2001年3月

註2　田中清美氏（財団法人大阪市文化財協会）にご教示いただいた。

註3　蓋坏の底部または天井部外面をヘラケズリする際にシッタのかわりに使用されたとする田辺昭三氏の想定。

註4　『瀬戸市史』陶磁史篇四

註5　『桜井市埋蔵文化財センター発掘調査報告書16集』第3章　三輪遺跡第8次発掘調査報告　桜井市教育委員会　1995年3月

註6　『河内長野市史第1巻（上）本文編考古』河内長野市役所　1994年3月

註7　『河内長野市埋蔵文化財調査報告書XV、宮山遺跡　西之山町遺跡　岩湧寺遺跡　誉所器陣屋跡』河内長野市教育委員会　1998年3月

註8　『韓式系土器研究Ⅲ』「尾張型須恵器の出現」韓式系土器研究会　伊藤禎樹　2004

註9　『信濃』第39巻第4号「尾張須恵器の提唱」岩崎直也　1987
『東国における古式須恵器をめぐる諸問題』「東海及び周辺における須恵器生産の成立」北武蔵古代文化研究会　岩崎直也　1987

註10　『韓式土器研究Ⅲ』「尾張型須恵器の出現」〔伊藤禎樹　2004〕を改変し、滝尻遺跡出土資料を追加して作成したもの。

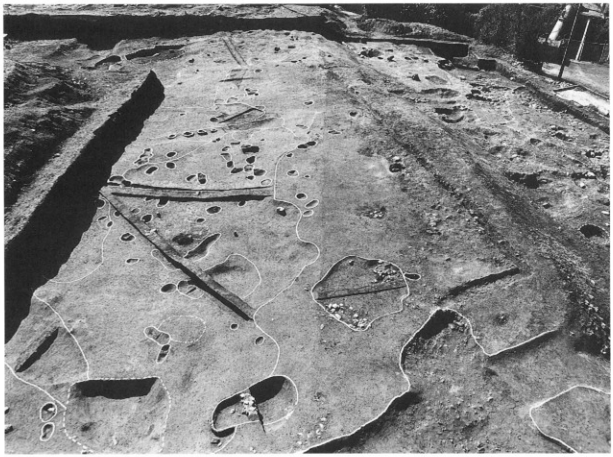
図　　版

図版1　第1調査区

調査区全景

遠景（北から）

1－1区全景（北から）



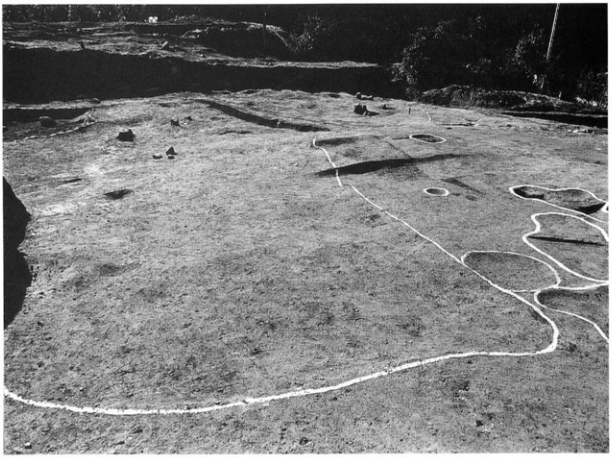
1－2区全景（東から）

SX1　全景（南から）

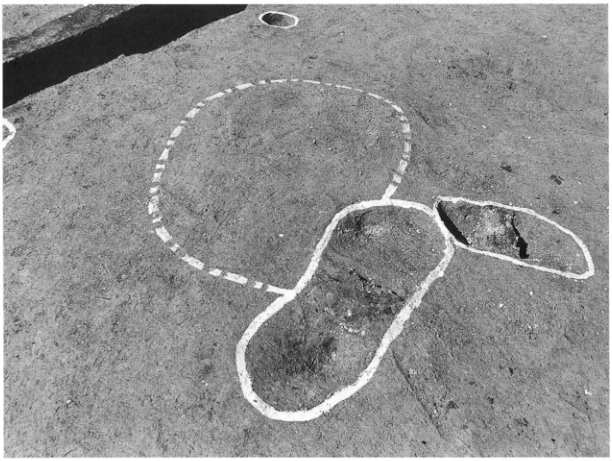
ＳＸ１（東から）

ＳＸ１内焼土検出状況（北から）

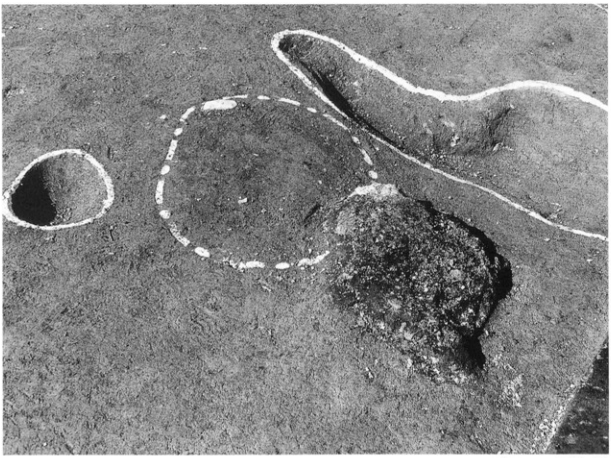
ＳＸ２　全景（南から）



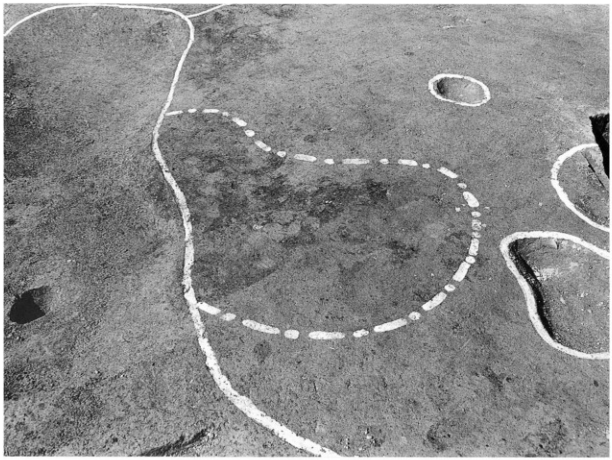
ＳＸ２（東から）



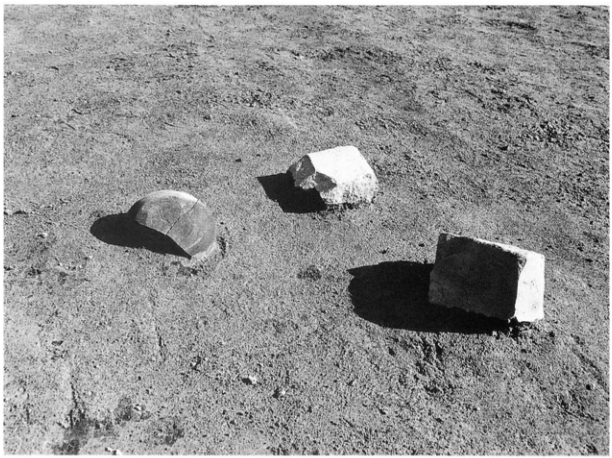
ＳＸ１内ＳＸ４（東から）



ＳＸ１内ＳＸ５（西から）



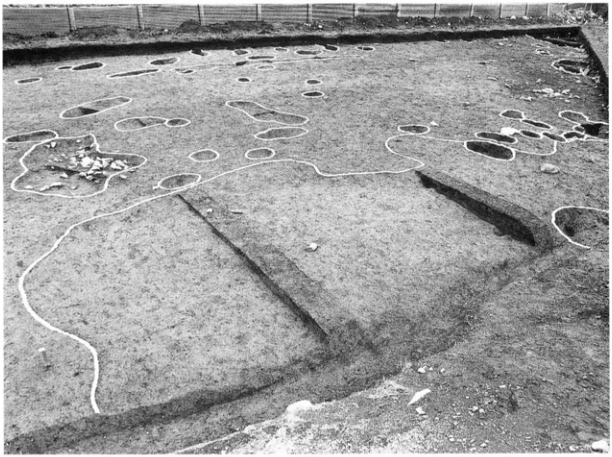
ＳＸ１内ＳＸ６（南から）



ＳＸ２　遺物出土状況（北から）

調査区全景

調査区全景（東から）



調査区（南から）

7

6

10

8

9

12

9

11

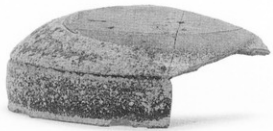
SX1（6～12）

23

22

24

34



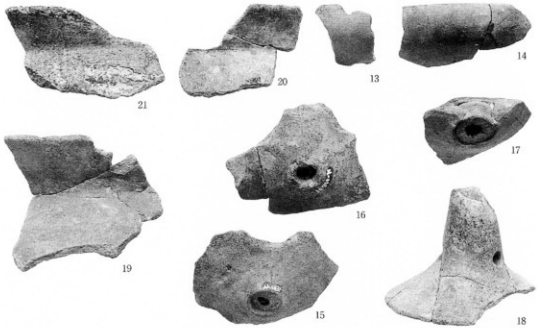
35

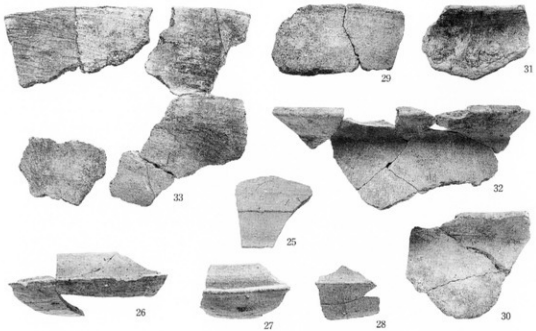
36

4

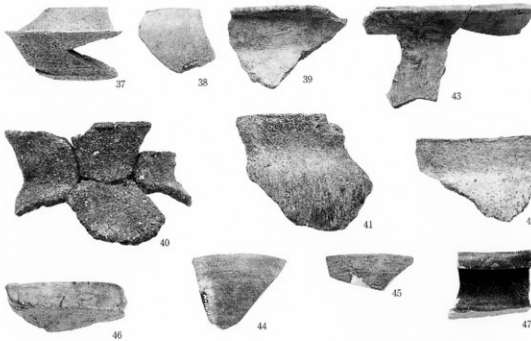
5

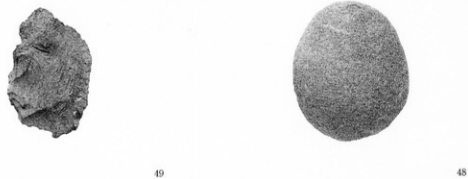
SX1（22・23）、SX2（24・34）、SD1（4・5）、包含層（35・36）





SX1（13~21）、SX2（25~33）





SK1（1）、SK2（2）、SD1（3）、SX3（50）、包含層（37～49）

報告書抄録

ふりがな	たきじりいせき
書名	滝尻遺跡
副書名	河内長野市埋蔵文化財調査報告書ＸＸⅣ
シリーズ名	河内長野市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	ＸＸⅣ
編著者名	太田宏明　酒井祐介
編集機関	河内長野市教育委員会
所在地	〒586-8501　大阪府河内長野市原町396-3　℡ 0721-53-1111
発行年月日	2006年3月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
滝尻遺跡	大阪府 河内長野市 滝畑	27216	府 河144	34° 32′ 58″	135° 32′ 07″	2004.1.21 ～ 2004.3.19	約2500㎡	滝畑ふるさと施設整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
滝尻遺跡	散布地	縄文 古墳 古代 中世 近世	土坑 ピット 落ち込み 溝 石垣	縄文土器 土師器 須恵器 土師質土器 瓦器 サヌカイト剥片 敲石	古墳時代の落ち込みを検出した。

河内長野市文化財調査報告書第44輯
河内長野市埋蔵文化財調査報告書XXIV

滝尻遺跡

2006年3月31日発行

発　行　大阪府河内長野市原町一丁目1番1号
河内長野市教育委員会
0721－53－1111
印　刷　(株)中島弘文堂印刷所